様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７０１２４

研究課題名（和文）十九世紀末フランスの小雑誌に関する研究――「解釈共同体」の観点から

研究課題名（英文）French Literary Magazines issued at the end of the 19th century: from the point of view of "Interpretive communities''

研究代表者
合田　陽祐（GODA, YOSUKE）

山形大学・人文学部・講師

研究者番号：２０７２６８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末のフランスの文芸誌を、異質な作家たちを結びつけ合う共同性の場として考察してきた。これまでに、各文芸誌内の個別のグループや雑誌外での集いの場、あるいは集団表象のあり方に注目して、研究成果を発表してきた。
とりわけ最終年度は、日本フランス語フランス文学会の東北支部で、「世紀末の文芸誌と作家たち」と題したシンポジウムを開催し、各論と総論の2つの発表を担当した。これまでに日本では知られてこなかった文芸小雑誌の紹介と分析に着手したことで、この領域の発展の端緒を切り開いた。

研究成果の概要（英文）：We have studied French literary magazines issued at the end of the 19th century as a place that worked to unite various types of writers. The outcome of the study has been published in a handful of articles focusing on particular groups frequenting the same journal, the sites of their social gatherings outside of it, and their collective representations found in the journal media.
In the final year, in particular, we successfully organized a symposium, “French Literary Magazines at the End of the 19th Century and writers,” with the cooperation of Society of French Language and Literature in Tohoku, where I had the opportunity to make two presentations: one an overview of minor symbolist journals and the other the analyses of them. Our project has successfully introduced minor French literary journals and offered rudimentary analyses to Japanese academic circles. We opened a path in a scholarly field which had been long neglected in Japan.

研究分野：フランス19世紀末の象徴派寄りの定期刊行物

キーワード：世紀末の文芸誌　作家の集団表象　象徴主義　メルキュール・ド・フランス　白色評論　プリューム　エルミタージュ　アルフレッド・ジャリ

1. 研究開始当初の背景

(1) 19 世紀フランスの象徴派は、1890 年以降、その教義として個人主義を重んじたため、これまでにその集団性についての考察はあまりなされてこなかった。そこで本研究では、象徴派詩人の多くが寄稿していた代表的な 4 つの文芸誌（『メルキュール・ド・フランス』、『白色評論』、『プリューム』、『エルミタージュ』）を取りあげることで、この時代の作家間のコミュニケーションや、集団表象のあり方について検討することを着想した。

(2) そもそも、なぜこの分野での研究が遅れていたのかというと、19 世紀末の定期刊行物自体が希少だったためである。だがフランス本国では、近年のインターネットの普及にともない、国立図書館が電子図書館を立ち上げ、雑誌資料の公開も開始された。これにより、それまで貴重資料であった 19 世紀末の定期刊行物に関しても、総合的な研究が条件的には可能となった。本研究は、次第に充実してきたフランスで出版された研究書をも参照しつつ、日本においても独自の雑誌研究を導入することを背景として開始された。

(3) 我が国においては、これまでにも「フランスの作家と雑誌」のようなテーマで書かれた論文は、少数ながら存在した。だが、一つの期間を設定して、雑誌の構成そのものを対象として分析する研究は皆無だった。本研究が設定した 19 世紀末は、フランス文学史上、もっとも多くの雑誌や新聞が発刊された時期にあたる。こうしたこれまで看過されてきた文化史的なコンテキストも重視すべく、この時代の文芸誌の検討に着手した。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、19 世紀末のフランスに誕生した「小雑誌」（petites revues）と呼ばれる出版文化について、とくにその「解釈共同体」としての側面に注目し、実証的に検討するものである。具体的には、小雑誌に寄稿する象徴派の作家たちが、テクストの解釈戦略を共有しており、各人が同人に向けて、自分のテクストがどう読まれるのかをつねに意識しながら書いていたことを明らかにする。この解釈共同体が形成される 1890 年代前半に書かれたテクストに考察の範囲を定め、小雑誌が 19 世紀末の文学場の変容に果たした役割を探るとともに、解釈共同体における戦略の共有の意義をコミュニケーション論の枠組みからとらえることが、本研究の目的であった。

(2) 1890 年代前半に形成された小雑誌共同体の特性とは何かを考えるにあたり、作家たちが共有していた文学的関心や、それ以外のテーマに注目して検討を進めた。たとえば、ジャーナリズムの文章にもかかわらず、1890 年代の雑誌では、非常に難解な語彙や言い回しが採用されている。小雑誌のコミュニケーションのシステムは、エクリチュールの面で、一般の雑誌において作者が読者と取り結ぶ関係性とは、大きく異なるのである。また多くの場合、ひとりの作家は同時に複数の解釈共同体に属していたことから、小雑誌の解釈共同体が多元的・多重的であったことを示すべく努めた。『メルキュール・ド・フランス』誌のように、2 つ以上の解釈共同体を含む場合もあった。小雑誌がいかにして棲み分けを行い、また作家たちがどのように書き分けをしたのかを明らかにすることを目的とした。

(3) 1890 年代初頭の小雑誌では、創設者や主幹による宣言文が、メディアの方針を示す上で重要な役割を果たした。こうした主催者側の要求や雑誌のもつ規範性が、作家たちのテクストにどのようなかたちで反映されたのかを明らかにする必要がある。また小雑誌の主催者は、定期的に集会を開いたが、そのとき作家たちの間でどのようなやり取りが交わされ、またそれが共同体の生成にいかに寄与したのかをくわしく調査する。以上の（1）から（3）を軸に、小雑誌が作品発表のための媒体に留まらず、1890 年代の文学場と個別の創造行為をつなぐ上で特権的な役割を果たしていたことの解明を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究の柱となるのは、雑誌メディアを軸とする解釈共同体が形成される 1890 年代を代表する文芸誌の調査と、その結果を踏まえた実証的考察である。むろん日本において小雑誌を紹介する意義も大いにあるが、紹介だけにとどまらぬよう、先行研究を踏まえたうえで検討を行う。具体的には、現地の研究グループとの連携を通して、資料や情報を共有しつつ、独自の研究を進めることにした。本研究は、基本的には代表者が単独で実施するものだが、フランス・パリを拠点とする小雑誌研究グループ PRELIA と連絡を取り、意見や助言を請うこととした。

(2) 本研究の分析対象となる小雑誌は、そのほとんどがフランス国立図書館のサイトを通してダウンロードできる。だが、希少な資料やマイクロフィルム、インターネットでは検索できない当時の未見資料を収集し、直接手に取って調べる必要がある。そのためには、多くの資料があるフランス・

パリの国立図書館で現地調査を行う必要が最低限あった。またこの文献調査の補足を、パリのサント・ジュヌヴィエーヴ図書館でも行った。雑誌研究は、準備段階での関連文献の調査がもっとも重要な行程となるので、先行研究を参照しつつ、新資料の開拓も積極的に行った。

(3) 本研究では、論争を含むコミュニケーションと集団表現の場として小雑誌をとらえ直し、作家たちのネットワークを可視化させる要素としての間テクストに注目している。この間テクストについては、逐次データベース化していき、世紀末の「作家の共同体」を調査するさいの土台とすることを方法論とした。資料の収集と整理は、やみくもに実施するのではなく、おもにこの観点から行う。なおデータベース化にさいしては、各誌ごと、テーマ別に取り組むようにした。

4. 研究成果

(1) 研究成果は大別して次の 3 つの観点から行い、学会発表や論文の形でまとめられた。
まず、『メルキュール・ド・フランス』の初期号についての分析である。この分析では、雑誌編集部の意向が、どの程度誌面や連載記事に反映されているかを明らかにした。我々が注目したのは、この雑誌の個人主義へのこだわりである。編集部は何らかの流派に雑誌の同人が属し、あらかじめ共有された観念の表出の場として雑誌が機能することを強く否定している。その代わりに打ち出されているのが、アルカイスム等の特殊な趣向を、様々な手段によって独自に表現する、拘束性の少ない自由な共同体のあり方であった。
批評欄においても、同人は反レアリスム的な演劇観を共有している。だが、観念の表現に適した詩の形式を演劇ジャンルに求めていることこそが、初期メルキュールの共同体にとって本質的なのであって、レアリスム劇すべてを否定していたわけではなかった。こうした文学ジャンルの問題は、『メルキュール』の初期号において、多くの同人にとって議論の対象となっていた。実際に雑誌記事をつぶさに検証しつつ、こうした微細な点を論証した点に、この第一の方向性の学術的な意義がある。

(2) 第二点目として、アルフレッド・ジャリとレミ・ド・グールモンが手掛けた版画雑誌『イマジエ』の検討を行った。この雑誌の特徴は、イメージ（画像）とテクスト（文）の関係が非常に複雑な点にある。ジャリとグールモンの美学や図版の出典を確認したのち、このイメージとテクストが取り結ぶ関係を 4 種類に分類したうえで、その仔細を明らかにした。
先行研究において、すでに『イマジエ』におけるエクリチュールがエクフラシス的であることは明らかになっていたが、本研究ではさらに、エクフラシスを、その対象が明示的なものと暗示的なものに大別したうえで議論を行った。そして、その暗示の手法の具体例の提示や、作者や制作年代の異なる版画を並置し、アナクロニックな観点から図像にコメントを入れていく編集部の基本方針を明らかにした。とりわけジャリが版画を並置するさいは、グールモンには見られない特殊な方法が採用されていた。たとえばジャリは、画像の連続を、彼が熱狂的に愛したことで知られる「コマ割り漫画」に見立てて、そこに物語を読み込んでいる。先行研究ではこれまで、これらの 2 つの関係性は指摘されてこなかった。このように日本に未紹介の雑誌をたんに紹介するだけでなく、新たな知見を盛り込みつつ提示するよう努めた。

(3) 第三に、(1)で見た『メルキュール・ド・フランス』に加えて、『白色評論』、『プリューム』、『エルミタージュ』の紹介を学会発表において行った。そしてその後、論文の形にまとめて刊行した。この論文ではまず、1880 年代の小雑誌と、その廃刊後に再編成によって成った 1890 年代の小雑誌の編集上・構成上の差異を提示した。そのうえで、1890 年代の小雑誌の集団活動について論じた。各誌のコラム欄の特徴や、思想的な差異を整理して検討したほか、雑誌の同人メンバーの集会、有名な晩餐会などについても紹介した。これらについては、日本ではまったく言及されてこなかったので、学会では多くの反応を得た。現在、続編となる論文を執筆中である。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
①<u>合田陽祐</u>「初期『メルキュール・ド・フランス』誌の方針と実際」、『レットル・フランセーズ』、上智大学フランス語フランス文学会、第 35 号、pp. 41-52、2015 年 7 月
②<u>合田陽祐</u>「1890 年代の「小雑誌」グループについて」、『Nord-est』 、日本フランス語フランス文学会東北支部、第 9-10 号、pp. 2-7、2016 年 5 月。
③<u>合田陽祐</u>「編集者としてのジャリとグールモン――前衛版画雑誌『イマジエ』について」、『Nord-est』 、日本フランス語フランス文学会東北支部、第 9-10 号、pp. 20-25、2016 年 5 月。

④合田陽祐「『イマジエ』とジャリの美術批評の方法について」、『EBOK』、神戸大学仏語仏文学研究会、第 28 号、pp. 61-79、2016 年 5 月。
⑤合田陽祐「ロジャー・シャタック著『祝宴の時代――ベル・エポックと「アヴァンギャルド」の誕生』書評」、『週刊読書人』第 3113 号、6 面、2015 年 10 月

〔学会発表〕(計 4 件)
①合田陽祐「「小雑誌」から見る世紀末文学場の変容――『メルキュール・ド・フランス』の批評欄を中心に――」、関西シュルレアリスム研究会、於大阪大学、2015 年 2 月 1 日
②合田陽祐「1890 年代の文芸誌とその機能――『メルキュール・ド・フランス』、『白色評論』、『ラ・プリューム』、『レルミタージュ』を中心に――」、日本フランス語フランス文学会東北支部会、於石巻専修大学、2015 年 11 月 7 日
③合田陽祐「十九世紀末前衛におけるアナクロニズムの問題――グールモンとジャリの版画雑誌『イマジエ』の場合――」、日本フランス語フランス文学会東北支部会、於石巻専修大学、2015 年 11 月 7 日
④合田陽祐「『イマジエ』とジャリの美術批評の方法について」、関西シュルレアリスム研究会、於近畿大学、2015 年 12 月 27 日

〔図書〕(計 1 件)
①合田陽祐「「操る声」と「声の借用」――ジャリにおける蓄音機、催眠術、テレパシー」、平凡社、鈴木雅雄・塚本昌則編、共著、2016 年夏刊行

〔産業財産権〕
○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
合田 陽祐(Yosuke GODA)
山形大学人文学部専任講師
研究者番号:20726814

(2)研究分担者
( )

研究者番号:

(3)連携研究者
( )

研究者番号: